
瞳をそらさずにいて

優衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瞳をそらさずにいて

【Nコード】

N4453B

【作者名】

優衣

【あらすじ】

あの日の僕に女は言った。「目玉、100円でいいかしら？」僕と女の、奇妙な物語はあの時から始まった…

今日は雨だ。傘を片手に歩き始めると、あの女がまた僕に声をかけてくるかもしれない。

そんな錯覚にとらわれて、振り向いた。ただビルが雑然と並ぶ東京が、もう光を失った僕の瞳に映る。

冷たい雨にうたれながら、女は何を思ったのだろうか。生きる希望をみつけたのだろうか。いや、あの女はもともとから生きてなどいないのかもしれない。

汚れてしまった街と自分。そして、絶望の中を生きるあの女に、もう一度会いたい。

傘を閉じて、空を見上げながらそう願った自分を、あの女はどこから見ているんだろう。

そして……嘲笑う。

「ねえ、君どこから来たの？」

声をかけられて僕は目を覚ました。狭いビルとビルの間に、うす汚れた服を着て寝ていた僕を、どう思ったのかは知らない。

「黙ってちゃわかんないよ。ぼく何年生？」

当時8歳だったぼくは、小さな体を動かして、きつく握った右手を女の前につき出す。

「なに、これ？」

白いワンピースの女が訊く。

雨だというのに、傘もささず麦わら帽子をかぶったまま、長い髪をだらりとたらしめている女は、まだあの時の父さんがみせてくれたホラー映画の幽霊役を思わせた。

父さんのことを思いだしたくないからか、右手にあるモノをぎゅつと握るぼくは、まだ幼かった。

「……………した」

「え？」

「殺…し…た…父さん…のこと」

「冗談いっちゃだめだよ。」

ほら、といって女は自分の手を差し出すと優しく

「帰ろう？」

と言った。

その手にぼくはアイツの目玉をのせた。

「……………」

驚かせてやろうと思ったのに、女は無言のままだ。そして、女は口元をつり上げた。

「ねえ…この目玉、私に売ってくれない？いくらでもいいわ」
ぼくは笑って、

「この目玉は父さんのだよ。ぼくに乱暴するから取っちゃった…」
いつの間にか、ぼくの目から涙が流れていた。

「おかしいな…大好きだったのに…何でだろう…？」

「泣かないで…いいの。あなたは悪くないわ」

優しい口調で女は言った。

「人はね、変わっちゃうものなの。仕方のないことよ…いつだって人間は人を裏切るものなの…」

「ところで…目玉100円でいいかしら？」

父さんが必要としてくれるなら、いくらでも構わなかった。

「いいよ…」

女はぼくの手に100円玉をすべらせると、目玉を眺めて言った。

「綺麗ね…ねえ、今度会う時はあなたのこともらっていいかしら？
内臓でもいいから。私、そろそろこの体に飽きてきたのよね…」

どす黒い目でなめるようにぼくの体を眺めた。

ぼくにとって父親のいないぼくはもはや誰からも必要とされない人

間だ。

「いいよ。でも：母さんの体から出ていってくれるなら」
女は目を見開いた。そして、言った。

「あらそう：あなたのお母さんだったのね、この体。お母さんは生きてるわ。私の中でね：」

そうだ。母さんが失踪したのはほんの2ヶ月前。

優しかった父さんが狂ってしまったのはこの女のせいだ。

来る日も来る日も母さんを待ち続け、そしてぼくにまで手をだした。ぼくは怖くなって、寝てる父さんの首を締め続けた。

見開いた目がぼくを睨んでいるような気がして思わず眼球を抜いてしまった。

誰かに助けて欲しかった：

そうだ。ぼくを生かすのも殺すのも全部この女だ。ぼくは確信した。

「母さんの体にあきたら、ぼくの体を持っていけばいい。」

「ありがと。最近の子はやけに大人っぽいのね。300年ずっと生きてきた私には分かんないわ：そうね、千体目の体は君の体にしようかな」

女はそう言うのと、東京の街に消えていった。

あれからもう20年。僕には妻もできて、今では立派なサラリーマンだ。

――あのあとは、警察が次々と僕のした犯罪を暴いたが、僕は罪にはとわれなかった。

児童相談所などにつれていかれたが、異常なしとみられ何気ない人生を何事もなかったかのように過ごしてきた。

この平和はいつまで続くのだろうか…。

家に帰りついた僕を妻が迎えた。そして、またキッチンへと走ってゆく。

それと同時に、鮮血の飛び散る音と妻のうめき声。

——そういえば、この近くで失踪中の母が発見された、という情報が入っていた。そして、逃げ出した、とも。

女はどこに隠れていたのか、僕の家から出てきた。そして言った。

「内臓、100円でいいかしら？」

これでやっと、母はこの女から解放される。僕は静かに頷くとともに、涙が溢れているのに気づいた。

（後書き）

この作品は国語の授業で書いたものです。よくこんな先生に提出したなあと自分で呆れてます。

ですが、初めて完成させた小説なので、感想などいただけると嬉しく思います！まだまだ未熟者ですがどうぞよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4453b/>

瞳をそらさずにいて

2011年1月28日10時51分発行